女性学評論　第32号　Women's Studies Forum No. 32（March 2018）pp. 223-225

優秀賞論文要旨

知られざるセシル・シャミナードの世界

―《六つの演奏会用練習曲》作品35全曲演奏に向けての一考察―

齋　藤　奈都美

本論はフランスの女性作曲家、セシル・ルイーズ・ステファニー・シャミナード（Cécile Louise Stéphanie Chaminade, 1857-1944）に関する研究史を明らかにし、資料の収集と整理によって、この音楽家の再評価を行うことを目的とする。その上で、シャミナードが活発に作曲活動を行っていた29歳頃に出版されたピアノ独奏曲《六つの演奏会用練習曲 *6 Études de concert*》作品35（作曲年不詳、1886年出版）について、楽曲分析を通して各曲の関連性を明らかにし、全曲演奏の意義及び現代においてシャミナード作品を弾くことの意義を論じる。

シャミナードは生前、フランス国内外で人気を博し、高い評価を受けていた。12歳の頃、ビゼーに才能を見出され、22歳でサン＝サーンスらが立ち上げた国民音楽協会の会員となり、フォーレと比肩すべき存在とみなされた。1894年にはヴィクトリア女王に御前演奏を行い、1913年には女性作曲家として初のレジオン・ドヌール勲章を授与された。このように作曲家としても演奏家としても実力を認められていたシャミナードであるが、死後の研究は散発的にしか行われておらず、その生涯や作品について信頼できる包括的な資料は揃っていないのが現状である。しかるべき再評価に向けて、研究と演奏の両面から光を当てていく必要がある。

第１章第１節では、欧米と日本における女性作曲家についての研究動向を概観し、音楽におけるフェミニズム批評の存在、音楽とジェンダーの関わりを論

じた。同第２節では、三人の女性作曲家（ファニー・メンデルスゾーン＝ヘンゼル、クララ・ヴィーク＝シューマン、アルマ・シントラー＝マーラー）を取り上げて、当時の社会情勢、女性に対する考え方、家庭環境との結びつきに焦点を当てて考察した。

第２章第１節では、シャミナードの生涯と演奏・創作活動の要点を明らかにした。シャミナードの作品は約400曲で、200曲近いピアノ作品と135曲以上の歌曲が大半を占めた。その他に管弦楽曲やバレエ音楽、室内楽作品など、作曲ジャンルは多岐に亘った。同第２節では、シャミナードに関する先行研究を洗い出し、主要文献９点についてその内容をまとめた。

第３章第１節では、《六つの演奏会用練習曲》作品35の成立過程を探り、同第２節では、作品35を全６曲にわたり「構成」「練習曲としての目的」「特徴」の三点から分析し、比較・考察を行った。「特徴」では、芸術的側面と音楽的要素（旋律、和音、アーティキュレーション）とを結びつけながら、各曲の特徴を捉えた。それらを生かし、ピアノでどのように演奏することが有効か、演奏家の視点で論述した。

全６曲の分析により、技術の習得を目指した「練習曲」としての要素と、シャミナードのピアノ作品に多く見られる「性格的小品」としての要素とが、各曲にそれぞれ与えられていることが明らかになった。その上で傾向を見ると、「練習曲」の要素が濃厚な第１曲〈スケルツォ〉、第４曲〈アパッショナート〉、第６曲〈タランテラ〉と、「性格的小品」の要素が際立つ第２曲〈秋〉、第３曲〈糸を紡ぐ娘〉、第５曲〈即興曲〉とに分類できる。

また、軽快さと重厚さの点で見ると、続く曲同士の性格が異なったものとなるよう、交互に配置されていることが分かる。さらに、「急緩急」「急緩急」の二組が組み合わされた構成と見ることができる。

この分析結果を大いに活用し、シャミナードの多彩な音楽的表現を味わえるよう、全６曲を通しての演奏に取り組む所存である。

筆者が最初にシャミナードの作品に惹かれたのは小学生の時で、作曲者が女

性だとも知らず、また女性作曲家はなかなか認知されないという問題も知らなかった。その後、楽譜の取り寄せに苦労し、次第にジェンダー・バイアスに阻まれていることに気がついた。今回、生前と没後の評価の落差を改めて知り、研究と演奏の双方から再評価を推し進めていく必要性を痛感した。